The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂の印章
Author(s)	大阪大学大学院文学研究科
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24994
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂の印章

大阪大学大学院 文学研究科

序文

本書は、平成十八年度の懐徳堂センター「懐徳堂デジタルコンテンツ制作事業」、および文学研究科共同研究「懐徳堂「印章」の総合調査と電子情報化」による成果の一部である。この研究は、もともと平成十七年度の漢籍資料学演習「懐徳堂文庫漢籍の研究」という基礎作業を踏まえたものであるが、このたび、デジタルコンテンツ「懐徳堂印―中井竹山編―」が完成し、ＷＥＢ懐徳堂（http://kaitokudo.jp/）に掲載されたのを機に、小冊子としてまとめるに至ったものである。

懐徳堂文庫の印章については、その印譜である『懐徳堂印存』の存在は知られていたが、印の実物の調査研究はほとんど進んでいなかった。そこで、この研究では、懐徳堂文庫に実在する二百を越える印章を整理調査しつつ、『懐徳堂印存』との対照作業を進めた。作業には、大阪大学中国哲学研究室の学生諸君および関係各位の協力を得た。

湯浅邦弘

【目次】

序文 …… 1
凡例 …… 3
本文
中井竹山 …… 4
中井履軒 …… 18
中井蕉園・中井碩果 …… 34
中井柚園・中井桐園 …… 42
中井木蒐麻呂 …… 52
附録
（一）用語解説 …… 56
（二）『懐徳堂印存』解題 …… 58
（三）『懐徳堂印存』序 …… 60

【凡例】

・各人物の印の順番は、『懐徳堂印存』三冊本に従う。各印は、「解説」・「三冊本『懐徳堂印存』該当ページ写真」・「印紐写真」・「印面写真」によって構成する。ただし、『印存』に収録されていないものは、『印存』の写真を欠く。

・解説は、左記「解説」凡例に従った。

・冒頭の印文の字体は刻印文字に忠実な表記とし、解説の字体は基本的に現行字体を用いた。ただし解説中の項目（一）については、刻印文字に忠実な表記をし、カッコ内に現行字体を注記した。

「解説」凡例

印文

（一）篆字（連印や両面印など、印面を二つ有するものは、／で分けて表記した。）

（二）印面の大きさ（縦×横。円形の場合は直径を記す。いずれも単位は㎝。）

（三）形・印面・技法など

（四）『懐徳堂印存』三冊本・二冊本・七冊本における葉数及び注記。（巻数ごと表紙の次の葉を第一葉とし、カッコ内は人物ごとの葉数を表す。この場合は人物名を第一葉としている。）印材について注記がないものはすべて石印。なお、七冊本は重建懐徳堂で講師を務めた大江文城が書き入れを行っている。これらの詳細については、58頁附録（二）解題参照。

出典・典拠・注釈・その他

（担当者名）

中井竹山（なかいちくざん）

（一七三〇～一八〇四）

懐徳堂四代目学主。中井甃庵（なかいしゅうあん）の長男。名は積善（せきぜん）、字は子慶（しけい）、通称は善太（ぜんた）。号は竹山、同関子（どうかんし）、渫翁（せつおう）、雪翁（せつおう）。諡は文桓、のち文恵。享保十五年（一七三〇）、懐徳堂内に生まれる。中井履軒の二歳上の兄。弟の履軒とともに五井蘭洲（ごいらんしゅう）に師事して朱子学を学び、のち懐徳堂の黄金期を築いた。竹山は、父甃庵の亡き後、二十九歳で預り人に就任して三宅春楼（みやけしゅんろう）を支え、また、春楼亡き後は、学主（教授）として懐徳堂の経営に努めた。

中井竹山肖像画

懐徳堂の内部では、「安永七年（一七七八）六月定」全八条を初めとする懐徳堂の諸規定を整備し、寛政四年（一七九二）の学舎再建に尽力するなど、懐徳堂の発展に努めた。諸規定の整備の一環として注目されるのが、白鹿洞学規と入徳門聯である。

白鹿洞学規とは、南宋の朱子が白鹿洞書院に掲げた学生心得である。懐徳堂では、天明二年（一七八二）、中井竹山が第四代学主に就任した際、この学規を巨板に刻んで講堂に掲示し、また中井履軒もこれを抄写して堂内に掲げたという。懐徳堂文庫には、その履軒抄写本の拓本が残されている。

また、入徳門聯とは、庭に通じる中門に掲げられていた竹製の聯で、「力学以修己　立言以治人（学を力めて以て己を修め、言を立てて以て人を治む）」と竹山の筆で記されている。自己修養とそれに基づく経世の重要性を説く内容で、懐徳堂の基本的理念を表している。

入徳門聯

また他方、安永三年（一七四四）、経世策をまとめた『社倉私議』を龍野藩に呈出し、天明八年（一七八八）の松平定信の来坂に際してその諮問に答え、それを『草茅危言』にまとめるなど、対外的にも活躍した。

思想的には、朱子学を主体としつつ、陽明学をも排除することがなかったとされる。主著に、荻生徂徠の『論語徴』を論駁した『非徴』、日本史ブームの先駆けとも言える『逸史』、年少者向けに「人の道」を箇条書きにした『蒙養篇』などがある。また、竹山が知人や門人から問われた学問・政治・経済など種々の問題について答えた書簡を集めたものとして、『竹山先生国字牘』がある。享和四年（一八〇四）、七十五歳で没。

天子知名（てんしちめい）

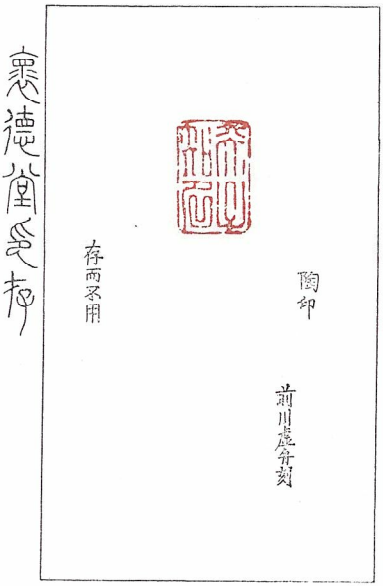
（一）天子知名
（二）3.1×2.0
（三）長方形・陽刻・単郭・点画垂直
（四）三冊本　一巻十一葉（竹山五葉）　「陶印」「前川虚舟刻」「存而不用」
　　二冊本　一巻十九葉（竹山十八葉）左　注記なし
　　七冊本　一巻十一葉（竹山五葉）　「陶印」「前川虚舟刻」「存而不用」「右顧亀紐」

経学を好み詩作に長じた光格天皇（在位一七八〇～一八一七）が、ある時、公卿の高辻胤長に、「朕は嘗て竹山の書はみたれど、履軒のは未だ見しことあらず、履軒はあまり書をかかぬさうぢやノ」とお話しになり、これを聞きつけた篆刻家の前川虚舟が、儒家の光栄であるとして竹山と履軒とに磁印を贈った。「天子知名」とは、この磁印に刻されていた文字で、「天皇が名前をご存知である」の意。なお、二者の性格の違いからか、竹山はこの印を使用せずに大切に保管していたのに対して、履軒は使わないのみならず、行方を不明にしてしまったという。（『懐徳堂事典』七十七頁参照）

前川虚舟は、生没年未詳。名は利渉、号は虚舟。別号は石鼓館。大阪の人。京都で高芙蓉に刀法を学び、細字の彫刻に天才的な技量を見せた。中井竹山に師事して儒学・詩文を学び、木村蒹葭堂に出入りし、岩倉具選（家具）に伝えた。ただし、名利を求めず、頼まれた仕事も気が向かねばやらず、彼の真価を認める具眼の士は当時いなかったため、無名で一生を終えた。文化年間まで生存し、六十六歳の折の自署がある。著に『石鼓館印譜』など。

この印は懐徳堂と朝廷との関係を示すもので、竹山の印の中でも歴史的観点から特に重要である。

（村田誠治）


陶印
前川虎斧刻
存西系用

子慶氏（しけいし）

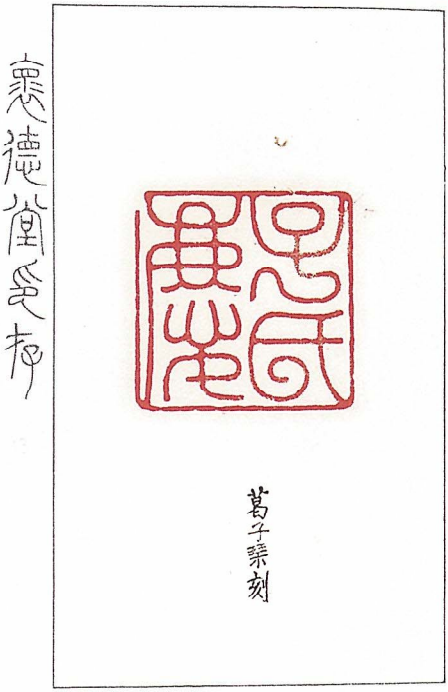
（一）子慶氏
（二）5.1×5.1
（三）方形・陽刻・単郭・円転
（四）三冊本　一巻二十葉（竹山十四葉）　「葛子琴刻」
　　二冊本　一巻十四葉（竹山十三葉）　注記なし
　　七冊本　一巻二十葉（竹山十四葉）　「葛子琴刻」・「石印木方紐」

「子慶」は中井竹山の字。

葛子琴（かつしきん）（一七三九～一七八四）は、本姓の葛城氏を修して葛という。名は張。橋本氏。貞元を通称とする。父橋本貞淳は医者で、彼自身も医を業とした。彼は混沌社において最も秀れた詩人と評価されており、混沌社の盟主片山北海（一七二三～一七九〇）は「浪華の詩、必ず子琴を推す」と評している。また、子琴は詩作に秀でるだけではなく、篆刻にも巧みであった。彼は篆刻の方面では古体派の高芙蓉（一七二二～一七八四）に師事していた。古体派は、秦漢時代に作られた古銅印の醇朴な味わいのある作風をその特徴としている。子琴はよく師の刀法を受け継ぎ、その作風は流麗婉約（なだらかで美しく品があること）と評され、高芙蓉の社中においても傑出した存在であった。（『懐徳堂事典』九十四頁参照）

竹山の印は威厳を感じさせる大型の印が多く、この印は文字の円転が竹山の印の中で最も明確であり、印の大きさと合わせて懐徳堂の数多くの印の中でも一際目をひく。この堂々とした印の大きさと円転の筆致からは、当時の懐徳堂の隆盛が感じられる。

（村田誠治）


葛子崇刻

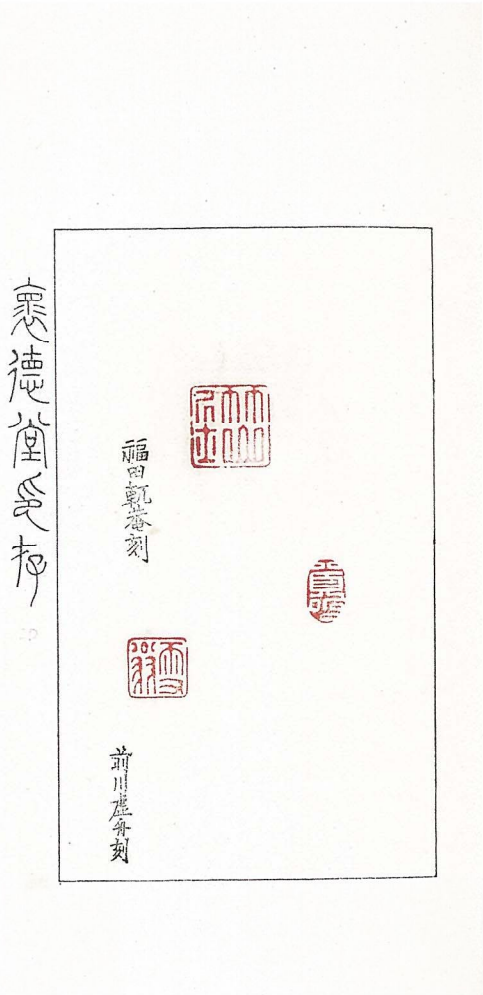
囂々（ごうごう）

（一）囂々
（二）1.6 × 1.0
（三）楕円形・無郭・陰刻・印文大小
（四）三冊本　一巻二十七葉（竹山二十一葉）左下　注記なし
　　二冊本　一巻三十四葉（竹山三十三葉）左上　注記なし
　　七冊本　二巻二十五葉（竹山六十六葉）　「石印」

「囂囂」とは、満足している様。（「孟子謂宋句践曰、子好遊乎、吾語子遊。人知之亦囂囂、人不知亦囂囂。曰、何如斯可以囂囂矣。曰、尊徳楽義、則可以囂囂矣。故士窮不失義、達不離道。窮不失義、故士得己焉。達不離道、故民不失望焉。古之人、得志沢加於民、不得志修身見於世。窮則独善其身、達則兼善天下。（孟子　宋句践に謂いて曰く、子　遊を好むか、吾　子に遊を語げん。人　之を知るも亦た囂囂たり、人　知らざるも亦た囂囂たり、と。曰く、何如なれば斯（ここ）に以て囂囂たるべき、と。曰く、徳を尊び義を楽しめば、則ち以て囂囂たるべし。故に士は窮しても義を失わず、達しても道を離れず。窮しても義を失わず、故に士　己を得。達しても道を離れず、故に民　望を失わず。古の人、志を得れば沢　民に加わり、志を得ざれば身を修めて世に見（あら）わる。窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす、と。）」（『孟子』尽心上）

小ぶりな印で、印文の釈読もやや難しい印であるが、他の懐徳堂印には見られない「囂々」という文字、およびややいびつな印影が逆に魅力的である。

（久保宗之）


福田鼎春刻
前川虎舟刻

子慶（しけい）

（一）子慶
（二）4.3×4.3
（三）方形・陽刻・単郭・印文大小・印中竪白
（四）三冊本　一巻三十三葉（竹山二十七葉）　「陶印」
　　二冊本　一巻二十九葉（竹山二十八葉）下　注記なし
　　七冊本　一巻三十五葉（竹山二十九葉）　「陶印」「蝦（がま）印」

「子慶」は、竹山の字。竹山の印の中でも力強く存在感がある印である。印面は大きく、全体的にかすれが目立つが、そのかすれ具合にも趣がある。紐の部分は、大きな蛙が象られ、一際目をひく。懐徳堂の印には蛙を象った印が数多くあるが、中でもこの印は最も大きく、また愛らしいと形容できるものである。竹山の印を見るだけでも、懐徳堂の黄金期であったことが感じ取れる。

（草野友子）

寒德堂老印
陶印

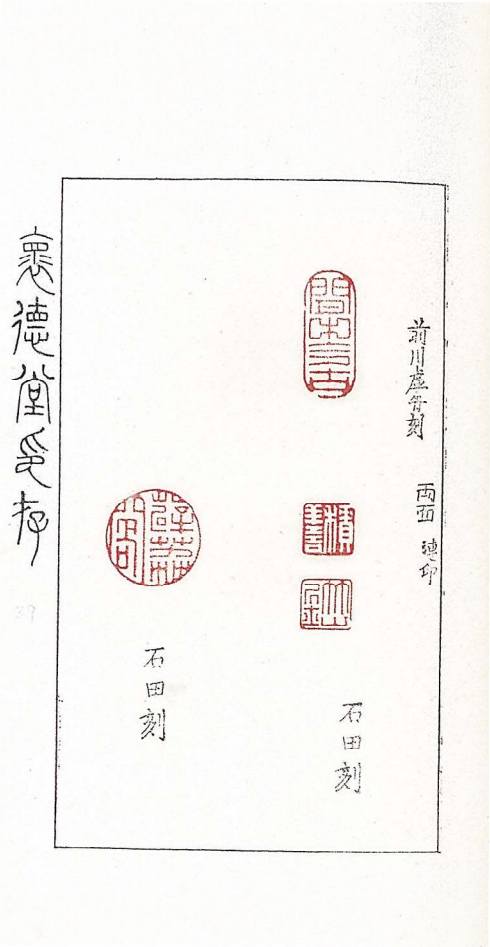
薜荔窩（へいれいか）

（一）薜荔窩
（二）直径 2.3
（三）円形・陽刻・単郭・点画垂直・印文大小
（四）三冊本　一巻四十六葉（竹山四十葉）左下　「石田刻」
　　二冊本　一巻三十葉（竹山二十九葉）左下　注記なし
　　七冊本　二巻四十葉（竹山八十一葉）　「石田刻」「石印」

「薜荔窩」とは竹山の書斎を指す。「薜荔」とはマサキノカヅラ（テイカカヅラの古名、キョウチクトウ科の蔓性常緑本木）。寛政十二年（一八〇〇）、中井蕉園が父である竹山の『中庸定本』を刊行した際、竹山は「大日本　津国浪華後学中井竹山子慶書於薜荔窩」と署している（参考：水田紀久「懐徳惜別」、『懐徳』六十八号、六頁）。

紐の形は八角形で、色はクリーム色、石製である。石の素材は不詳だが、大理石に似ている。小振りな八角形の紐と、繊細な字が美しい印面も魅力的である。

（南　雄介）

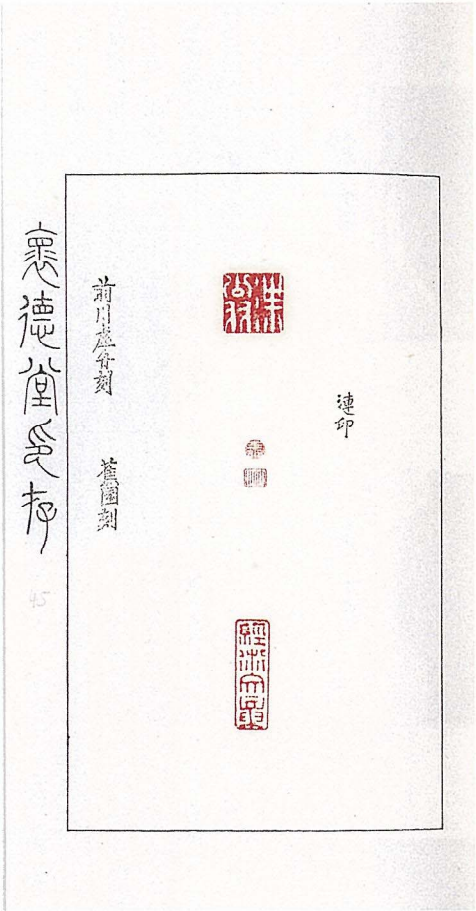

前川虎雄刻
両面 聽印
石田刻
石田刻

善（ぜん）　竹山（ちくざん）

（一）善／竹山
（二）直径0.5／0.4×0.5
（三）円形・陰刻・無郭／長方形・陽刻・単郭
（四）三冊本　一巻五十二葉（竹山四十六葉）中央　「連印」「蕉園刻」
　　二冊本　一巻二十三葉（竹山二十二葉）右、中央　注記なし
　　七冊本　一巻四十五葉（竹山三十九葉）　「連印」「蕉園刻」

「善」は、竹山の名「積善」の「善」。この印は、中井竹山の第四子、中井蕉園が刻したもので、一つの印の中に陰刻・陽刻両方が含まれている連印である。非常に小さく、繊細な印象を受ける。竹山の印は大きく力強いものが多いが、この印はそうではなく、そのことがさらに存在感を際立たせる。竹山の子、蕉園の手先の器用さを感じると共に、蕉園がこの小さな印に込めた思いを想像せずにはいられない。

（草野友子）


連印
前川庵貞刻
萩窟刻

中井履軒（一七三二～一八一七）

中井甃庵の第二子。竹山の二歳下の弟。名は積徳、字は処叔、通称は徳二。号は履軒あるいは幽人と号した。諡は文清。享保十七年（一七三二）、懐徳堂内で生まれ、兄竹山とともに五井蘭洲に朱子学を学んだ。竹山が懐徳堂学主として活躍したのに対し、履軒は後に懐徳堂を離れて私塾水哉館を開き、そこで膨大な経学研究を残した。

履軒の経学研究は、まず『七経逢原』があり（現存せず）、既存のテキストの欄外に自説を書き加えた『七経雕題』、それらを整理した『七経雕題略』へと進み、そして最終的に『七経逢原』として完成した。その研究は、脱神話、脱権威の批判的実証的精神に貫かれており、富永仲基・山片蟠桃らとともに近代的英知の先駆的存在であると評価できる。

一方、履軒は自らの住まいを、中国古代の聖王黄帝が夢の中で遊んだというユートピア「華胥国」になぞらえ、自らを「華胥国王」と称して、経学研究とは異なる思いを多く書き記した。そうした著作として、経世面では『華胥国物語』『有間星』、科学面では人体解剖図が記された医書『越俎弄筆』、「天図」「方図」、歌文面では『華胥国歌合』などがある。文化十四年（一八一七）、八十六歳で没。

天図（紙製）

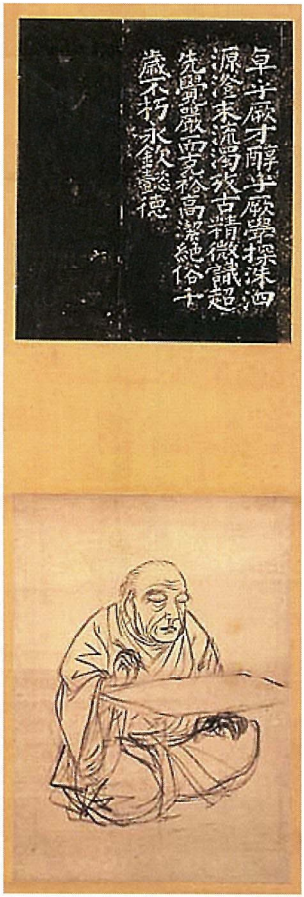
天図（木製）

方図

なお、履軒の印に関連して、「幽人」「水哉」について説明しておこう。

「幽人」とは、履軒の号の一つ。『周易』履卦の九二の爻辞に、「履道坦坦。幽人貞吉。（道を履むこと坦々たり。幽人貞にして吉。）」とあり、その象伝に「幽人貞吉、中不自乱也。（幽人貞吉とは、中にして自ら乱れざるなり。）」と説く。正しい道を坦々と履んで野に隠れる人であれば、その心中が穏やかで欲によって乱されることがないから、正しくて吉である、という意味。

「水哉」とは、孔子がしばしば水を称えていたということにちなむ語である。『孟子』離婁下篇に、孟子の弟子の徐子と孟子との問答が次のように見える。「徐子曰、仲尼亟称於水、曰水哉水哉。何取於水也。孟子曰、原泉混混不舍昼夜、盈科而後進、放乎四海、有本者如是、是之取爾（徐子曰く、仲尼亟水を称して曰く、水なる哉水なる哉と。何をか水に取れる。孟子曰く、原泉は混混として昼夜を舎かず。科を盈たして後に進み、四海に放る。本有る者は是くの如し。是れ之を取るのみ）」。これによれば、「水哉」とは、たゆみのない持続的な学問研究の姿勢を、常に流れて止まない水に喩えたものと言える。履軒は、懐徳堂から離れて開いた私塾に「水哉館」と名付け、また、自らの経学研究書に「水哉館学」と署名している。



中井履軒肖像画

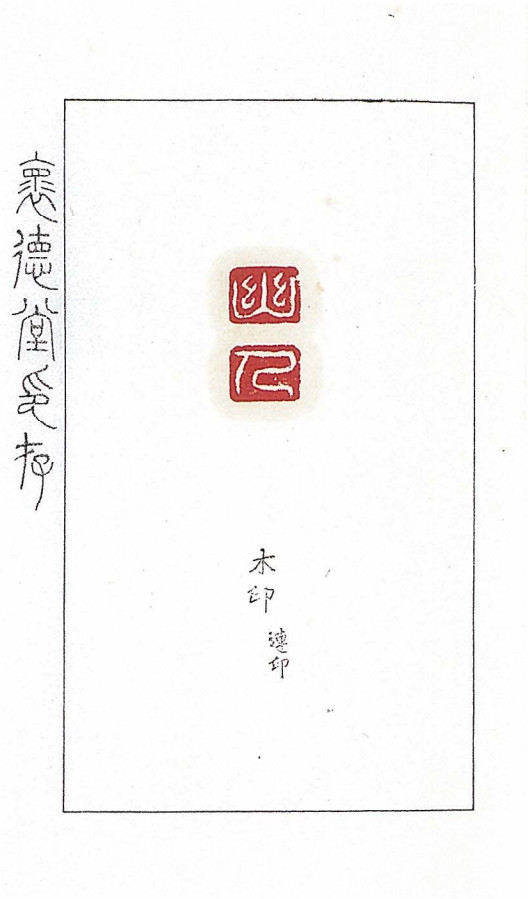
幽人（ゆうじん）

（一）幽／人
（二）1.3×1.6／1.2×1.6
（三）長方形・陰刻・無郭・円転／長方形・陰刻・無郭・円転
（四）三冊本　二巻十六葉（履軒十五葉）　「木印」「連印」
　　二冊本　なし
　　七冊本　三巻十六葉（履軒十五葉）　「木印」「連印」

「幽人」とは履軒の号の一つ。『懐徳堂事典』には「履軒の人生観を反映した号」と説明されている。履軒が三十歳前後に詠んだとされる詩の中（『履軒古風』所収）に、この号を用いているのが見られることから、懐徳堂に寄宿していた当時から用いていた号であることが分かる。ちなみに、履軒は三十四歳（一七二六）の年に懐徳堂を離れ、私塾である水哉館を開いた。

紐は、三冊本『懐徳堂印存』の注記のとおり木製。意図的であるかは不明だが、紐が箒または山を象ったような造りとなっている。現時点で制作者は判明していないが、履軒は自ら印を作成することもあったため、履軒作かとも考えられる。履軒は「幽人」の字を彫りこんだ印を、他にも数顆所持していた。また、「幽人」の出典となる『周易』の言葉（八文字。19頁参照）を彫り込んだ印章も大阪大学に伝わっている。なお、本資料は紐が破損しやすい状態のため、取り扱いに注意が必要である。

（池田光子）


木印
德印

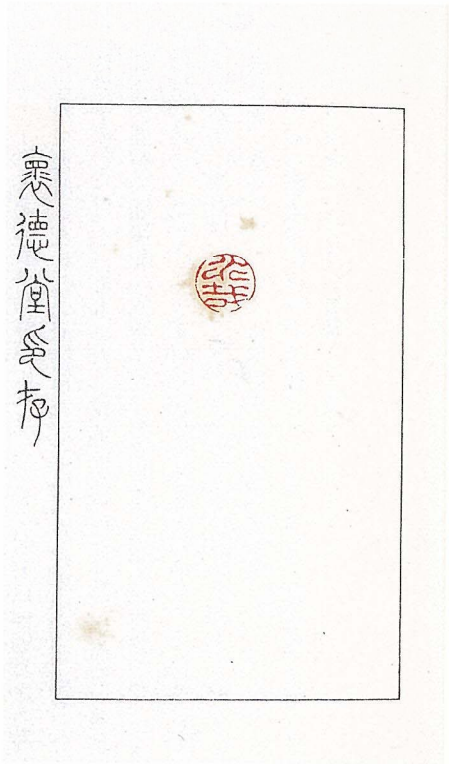
水哉（すいさい）

（一）水哉
（二）直径 1.6
（三）円形・陽刻・単郭・円転
（四）三冊本　二巻十九葉（履軒十八葉）　注記なし
　　二冊本　二巻七葉（履軒七葉）左下　注記なし
　　七冊本　三巻十九葉（履軒十八葉）　「石印」　紐の図示あり

「水哉」は、たゆみのない持続的な学問研究の姿勢を、常に流れて止まない水に喩えたもの。紐は何らかの山を模した形になっている。

履軒の印は水晶を印材に用いたり、布銭の形を模したりと、特徴的なものが多いが、この印は紐を山の形に象っており、その造形に美しさと独創性を感じる。また、篆字の「水哉」という言葉から履軒の学問に対する姿勢が窺え、その点でも興味深い印である。

（村田誠治）


褒德筐免拓

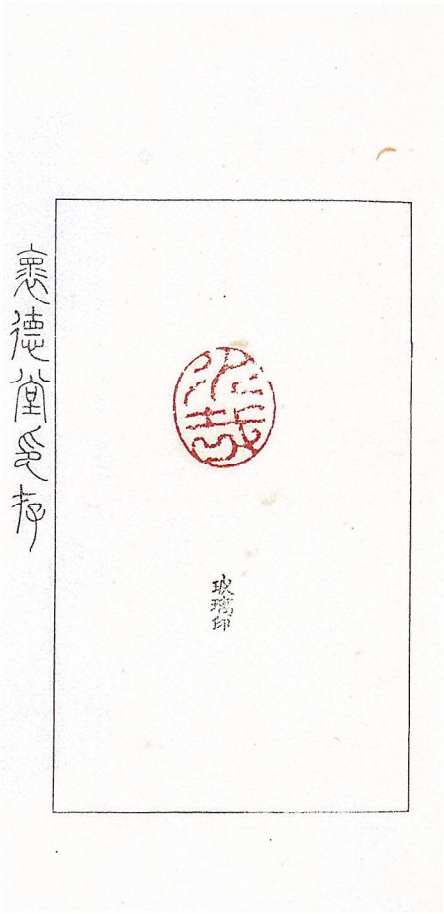
水哉（すいさい）

（一）水哉
（二）3.2×2.7
（三）楕円形・陽刻・単郭・円転
（四）三冊本　二巻二十二葉（履軒二十一葉）　「玻璃印」
　　二冊本　二巻十四葉（履軒十四葉）　注記なし
　　七冊本　三巻二十二葉（履軒二十一葉）　「玻璃印」「瓶栓」

『孟子』にある孔子の言葉にちなんだ号。履軒は懐徳堂から離れて開いた私塾に「水哉館」と名付け、履軒の経学研究の集大成とされる「七経逢原」には、自身の学問が成立したことを表して、「水哉館学」と署名している。『懐徳堂事典』では、「たゆみのない持続的な学問研究の姿勢を、常に流れて止まない水に喩えた」とこの号を説明する。また、履軒の随筆集『水哉子』（自筆抄本）の表紙見返しに、「水之性、不雑則清、莫動則平（水の性は、雑（まじ）えざれば則ち清く、動かすこと莫（なか）ければ則ち平らかなり）」と『荘子（そうし）』刻意篇の言葉が書き記されており、この意も踏まえるならば、履軒は、世俗と交わらないことで雑念に惑わされずに自身の意志を坦々と貫こうとした姿勢をも、「水哉」の言葉に含めていたのではないかと考えられる。

三冊本『懐徳堂印存』の注記どおりガラス製。動植物を象った紐ではない点と、捻るような、まさに水の流れを思わせる流線的な装飾が優雅で特徴的である。

（池田光子）


琉璃印

積徳之印（せきとくのいん）　處（しょ）

（一）積徳之印／處（処）
（二）2.1×2.0／2.8×2.8
（三）方形・陰刻・無郭・方折／方形・陽刻・単郭・円転
（四）三冊本　二巻二十四葉（履軒二十三葉）　「木印」「子母印」
　　二冊本　なし
　　七冊本　三巻二十四葉（履軒二十三葉）　「木印」「子母印」

子母印。子印の「積徳」は、履軒の名。母印の「処」は、履軒の字「処叔」に由来する。紐は四つ足の動物を形取っているが、デフォルメされていて何の動物であるかは定かでない。さらに脚部には装飾も施されており、履軒の趣向が偲ばれる。

（黒田秀教）

寒德萬象春
方印
千喜印

處（しょ）

（一）處（処）
（二）4.3×4.2
（三）方形・陽刻・単郭・点画歪斜
（四）三冊本　二巻二十六葉（履軒二十五葉）　「陶印」
　　二冊本　二巻四葉（履軒四葉）　注記なし
　　七冊本　三巻二十六葉（履軒二十五葉）　「陶印」「象紐」「自製ノ款アリ」

「処」は履軒の字「処叔」に由来する。「處」は「処」の旧字体。なんといっても象の紐が愛くるしい。紐が象になっているのは、当時長崎に象が上陸し、世間の注目を浴びていたことに影響されたものと考えられる。

（南　雄介）

陶印

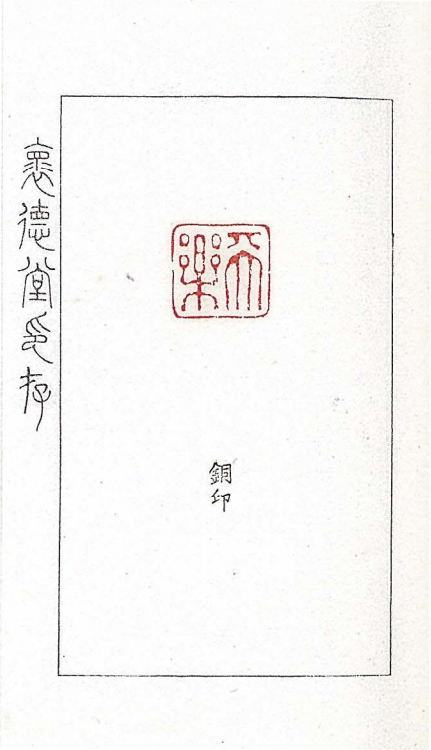
天樂（てんらく）

（一）天樂（天楽）
（二）2.9×2.9
（三）方形・陽刻・単郭
（四）三冊本　二巻四十三葉（履軒四十二葉）　「銅印」
　　二冊本　二巻六葉（履軒六葉）下　　注記なし
　　七冊本　三巻四十四葉（履軒四十三葉）　「銅印」「鐶紐」

中井履軒は、安永八年（一七七六）に再婚した後、華胥国門の扁額を取りつけた借家の二階の一室を、「天楽楼」と名づけた。これは、『荘子』天道篇の「与人和者、謂之人楽、与天和者、謂之天楽（人と和する者は、之を人楽と謂い、天と和する者は、之を天楽と謂う）」にちなんだものである。『荘子』は、人間同士が和することを「人楽」と言うのに対して、人が天の自然と和する境地を「天楽」と評した。そして、この天の楽しさをわきまえた者は、生きているときには自然のままに振る舞い、死んでいくときには万物の変化に従い、静かにしているときには陰の気と徳を同じくし、動いているときには陽の気と波を同じくする、と説いた。この思想は「無心の静けさ」につながっていくが、決して隠者（世捨て人）の立場を説いたものではなく、「天楽者、聖人之心、以畜天下也（天楽とは、聖人の心、以て天下を畜うなり）」とあるように、天下を経営するという理想を表している。（『懐徳堂事典』一〇一頁参照）

上部にある柿のような形状にも惹かれるものがある。

（久保宗之）


銅印

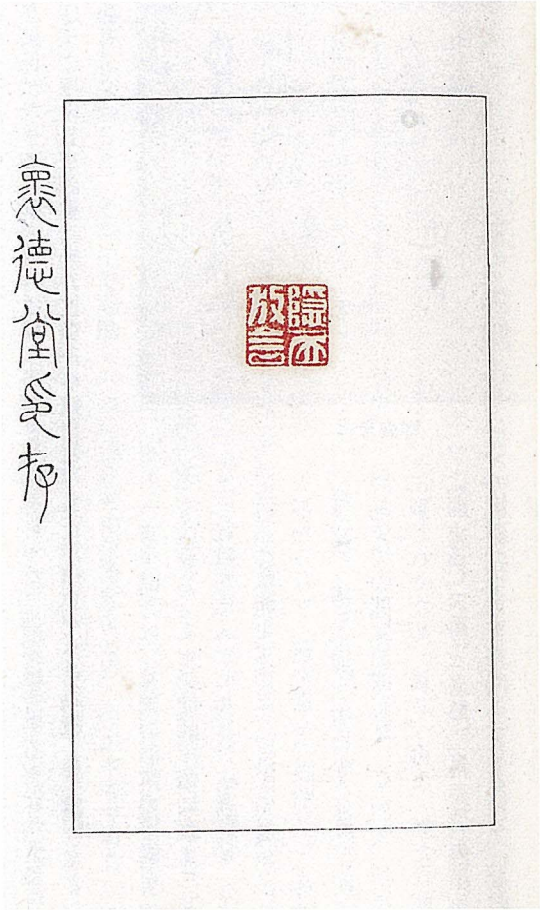
隠居放言（いんきょほうげん）

（一）隠居放言
（二）1.8×1.8
（三）方形・陰刻・無郭・点画歪斜
（四）三冊本　二巻四十九葉（履軒四十八葉）　注記なし
　　二冊本　二巻二十二葉（履軒二十二葉）上　注記なし
　　七冊本　三巻五十葉（履軒四十九葉）　「石印」

隠居放言とは、市井に居り世に出ず、超然としている状態のこと。西村天囚『懐徳堂考』に、「履軒嘗て人に謂て曰く、聖人の徳企て及ぶ可からず、若し夫れ隠居放言して、身は清に中（あた）り、廃しては権に中るは、吾儕（わがともがら）の地位なりと、二洲曰く、中行の士を学ぶも、猶其の中を失はんことを恐る、然るに今虞仲夷逸を学ばゞ、弊将に之を奈何（いかん）せんとす、履軒曰く、吾が志已に此に決すと、市井風塵の間に隠居して、権勢も屈する能はず、利禄も誘（いざな）ふ能はず、超然脱俗して、深山大沢の中に在るが如し、真に是れ逸民なり、精里称して天下の偉人と曰ふもの亦不当に非ず。」（下巻八十六頁）とある。

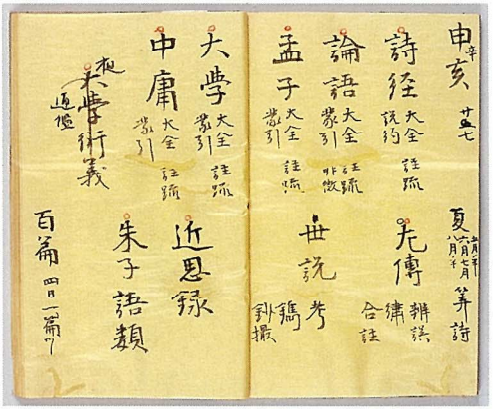
紐は平凡だが、印文に魅力を感じる。

（西本和巳）


褒德揚善

中井蕉園（一七六七～一八〇三）

中井竹山の第四子。名は曽弘、字は伯毅、通称は淵蔵。号は蕉園・仙坡。明和四年（一七六七）、懐徳堂内に生まれる。家学を受け、懐徳堂預り人となる。詩賦文章に長じ、歴史書『越史』（未定草稿）を著し、また、『周易』『礼記』『春秋左氏伝』などの経書の欄外に細字の書き入れを行った。備忘録である手記『雕蟲自為』からは、蕉園が父竹山の期待に応えようと日夜読書に励んだ様子が窺える。また、賦集である『雕蟲篇』などが残っており、一宵十賦の逸話なども



雕蟲自為

ある。

一宵十賦とは、蕉園の詩賦の才能を示す逸話。蕉園は、父竹山の期待を担って成長し、また学問的才能に恵まれていたが、特に、詩賦の才に優れていた。寛政四年（一七九二）、蕉園二十六歳の春、自らの才能を試そうとして、父竹山に賦題を求めた。竹山は、天象・地理・草・木・禽獣・虫・魚・器用・人事から各々一題を選んで課題とし、蕉園はそれに応えて、「露」「川」「芭蕉」「海裳」「鶏」「猫」「鈴虫」「金魚」「印」「読書」の十首の賦を午の刻から子の刻までの間に速成した。しかし、予め構想を練っていたのではないかと人に疑われたため、後日、再度、新たな賦題を請い、竹山から与えられた人事に関する「天爵」「嘉遯」「得志」「失意」「畏」「怒」「哀」「楽」「自悼」「自叙」の賦題で十首を完成させたという。なお、この時の計二十賦は、蕉園の賦集『雕蟲篇』に収められている。

蕉園は、文学的才能に恵まれ、竹山の期待を担っていたが、享和三年（一八〇三）、三十七歳の若さで亡くなった。

中井碩果（一七七一～一八四〇）

中井竹山の第七子。名は曽縮、字は士反、通称は七郎。号は碩果・抑楼。石窩とも記す。号の「碩果」は、『周易』剥卦上九の「碩果不食（碩いなる果食われず）」にちなむ。文化元年（一八〇四）、竹山の死去に伴い、三十四歳で懐徳堂五代教授となる。ただし、その際には、中井履軒が名目上の学主を務めており、両者の具体的な出講関係は未詳である。同十四年（一八一七）、履軒の死去により、教授（学主）となった。妻は頼山陽の母梅颸の従妹。天保三年（一八三二）、履軒の次男柚園の子の桐園を養子に迎えた。

碩果は、懐徳堂の学風の保持に努めたため、閉鎖主義的傾向に陥り、学問的には大きな発展をもたらすことがなかったとされる。しかし一方で、理財に長じていた碩果は、同志からの寄付金もあって懐徳堂の財政を立て直し、多くの蔵書・備品を増やした。

碩果の詩集として、『篪集』がある。また、懐徳堂学舎において、夜の講義の後に語られた談義を漢字片仮名交じり文で記録したものとして、「懐徳堂夜話」（全二巻一冊）がある。談者は中井碩果、筆録者はその門人の野村広善である。西村天囚旧蔵の原本が現在、懐徳堂文庫所蔵となっており、吉田鋭雄の校訂による翻刻が、『懐徳』第十五号（一九三七）に掲載されている。当時の懐徳堂では、毎月二・四・七・九の日に夜講が開かれていたが、その講義の後、碩果は門人と雑談を交わした。その中で記録しておくべき有益な話をまとめたのが本書である。天保七年（一八三六）九月二十二日から同十年十月二十二日まで、すなわち碩果六十六歳から六十九歳までの記録である。内容は、日付の後に当日の夜講で講じられたテキスト名をあげた後、夜話を筆録している。当時の世相や懐徳堂の特質、教授の人柄などを具体的に示す貴重な資料である。

なお、大塩平八郎も、幼時に碩果に教えを受けている。碩果は大塩平八郎の乱の四年後、天保十一年（一八四〇）、七十歳で病没した。

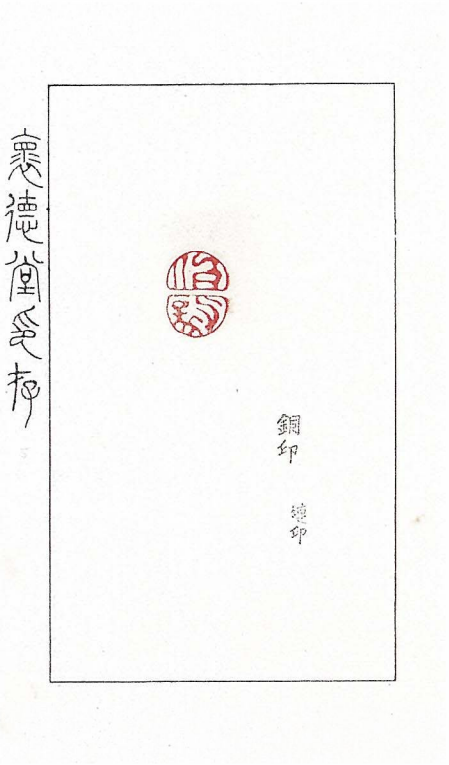
伯（はく）　毅（き）

（一）伯／毅
（二）1.0×1.7／1.1×1.7
（三）半円形・陽刻・単郭・円転／半円形・陽刻・単郭・円転
（四）三冊本　三巻七葉（蕉園六葉）　「銅印」「連印」
　　二冊本　二巻二十七葉（蕉園四葉）　注記なし
　　七冊本　四巻七葉（蕉園六葉）　「銅印」「連印」　紐の図示あり

「伯毅」とは蕉園の字である。

本印は、収納時には手鏡のような外観になるが、使用時には印面を回転させて用いる。利便性としては若干の難があろうが、その仕掛けは面白い。さらに印面も、半円形を二つ組み合わせた連印となっており、多重に意趣が施されている。しかし華奢な印象は、いみじくも早逝した蕉園を彷彿とさせる。

（黒田秀教）


銅印
德印

曽弘（そうこう）

（一）曽弘
（二）1.8×1.2
（三）長方形・陽刻・単郭・円転
（四）三冊本　三巻九葉（蕉園八葉）　「銅印」
　　二冊本　二巻二十八葉（蕉園五葉）　注記なし
　　七冊本　四巻九葉（蕉園八葉）　「銅印」「魚紐」

篆字は、中井蕉園の名を表したもの。紐は何れの魚を象ったものか。前びれで身を起こしている姿勢は、一般的に思い浮かべられる魚の形とは異なっており、両生類を彷彿させる造形が紐として趣深く、立ち上がろうとするひたむきさが目をひく。

（池田光子）

銅印

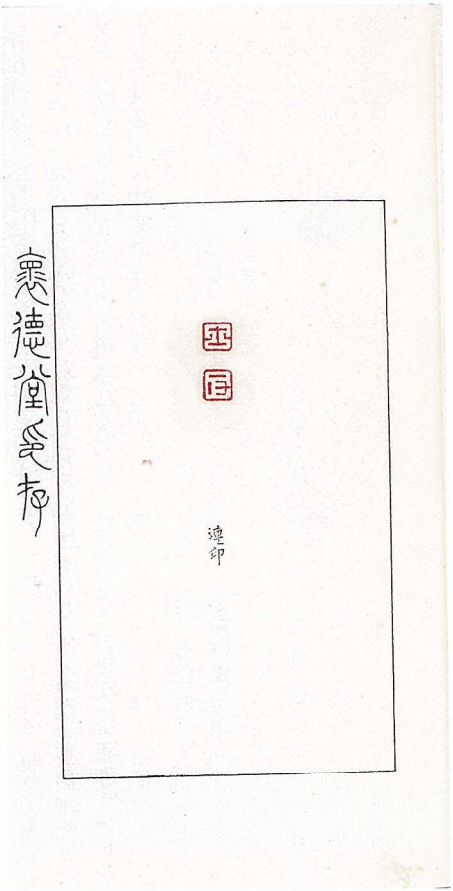
士（し）反（はん）

（一）士／反
（二）0.8×0.8／0.8×0.8
（三）方形・陽刻・単郭・方折／方形・陽刻・単郭・方折
（四）三冊本　三巻二十四葉（碩果五葉）　「連印」
　　二冊本　二巻三十二葉（碩果二葉）　注記なし
　　七冊本　五巻六葉（碩果五葉）　「連印」

「士反」とは、中井碩果の字。

一見、記号のようにしか見えない。ところが、そこには確かに「士」「反」の文字が刻まれている。陽刻であるものの、一瞬陰刻にも見えるような不思議な造形である。そこには、ほのかな遊び心さえ感じさせる。数少ない碩果の印の中で最も小さな印であるが、最も異質な存在感を放っている印である。

（草野友子）


連印

中井柚園（一七九五～一八三四）

中井履軒の第二子。名は環、字は君玉、幼名は菊麿、菊次郎、通称は雄右衛門。柚園は号。履軒が開いた私塾水哉館を継承し、水哉館教授となった。墓誌や行状などの記録がなく、伝記についてはほとんど不明。手記が数冊残されているほか、父履軒の『通語』の手写本や、履軒の書に書き入れたテキストを残しており、よく家業を継承したことは推測される。

また、父履軒との関係を示すものとしては、聖賢扇がある。これは、履軒が扇面の表に歴代の聖賢や学者の名を朱筆し、裏面にはこれらの人々を酒にたとえて面白く評を加えたものである。原本は失われて存しないが、文政三年（一八二〇）に履軒の子柚園が写したものが残されており、その扇面の記載は、『懐徳』十七号付録の吉田鋭雄「懐徳堂水哉館遺書遺物目録」に翻刻されている。

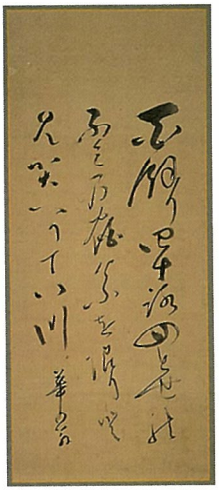
聖賢扇

本資料では、孔子孟子の正統儒学が「伊丹極上御膳酒」として絶賛される一方、漢代以降の儒者、宋代・明代の儒者については徐々に評価が厳しくなり、また、儒家以外の老荘や仏教、神道、禅宗などには手厳しい評価が下され、さらに、荻生徂徠と太宰春台は「鬼ころし」と酷評されている。諸学に対する履軒の評価、特に反徂徠の立場を明快に示す資料であるといえよう。

なお、懐徳堂文庫所蔵の『孝経大義』（履軒）の題簽も柚園の筆によるものである。天保五年（一八三四）、四十歳で没し、水哉館も閉じられた。

中井桐園（一八二三～一八八一）

中井柚園の子で、中井碩果の養子。中井履軒の孫に当たる。名は及泉、字は公混、幼名は鮒太郎。後、修治と改める。履軒没後の文政六年（一八二三）、水哉館で生まれる。中井碩果の死去に伴い、十八歳で懐徳堂最後の預り人となったことから、水哉館は懐徳堂に合併される形となった。年少で懐徳堂の預り人に就任したため、懐徳堂最後の教授 並河寒泉の指導・教育を受けつつ懐徳堂の経営に参画した。温厚な性格であったが、門下生や子女に対しては厳格であった。その子中井木菟麻呂は幼時の記憶として、「常に父の前に読書を授けらるることを畏れ、好みて外祖寒泉に就きたり」と語っている（『懐徳堂水哉館先哲遺事』六巻）。また一方で、蔵書・書画・家具什器類を売却するなどして、懐徳堂および並河・中井両家を財政面で支えたが、幕末維新の動乱に際し、『逸史』『詩律兆』『通語』『非物篇』『非徴』『瑣語』『質疑篇』などの版木を売却するまでに至った。（寒泉は桐園の行為を喜ばず、竹山の署名のあるものを一部買い戻した。）財政を支える桐園の努力もむなしく、明治二年（一八六九）に懐徳堂は結局廃校となり、寒泉と桐園とは府下の本庄村に移ることになった。同年十二月二十五日、廃校となった懐徳堂舎を去るときに寒泉は、「堂構于今百四十年、皐比狗続尚綿々、豈図王化崇文世、席捲講帷村舎遷」の漢詩と出懐徳堂歌「百餘り四十路四とせのふミの宿けふを限りと見かへりていづ華翁」（百四十四年間続いた学舎も今日限りだと見返りながら門を出る、の意）とを門に残した。原本は門から剥がされて存しないが、後に中井木菟麻呂が寒泉に同じ歌を書いてもらったものが軸装されて現在に残っている。



出懐徳堂歌

懐徳堂の閉校後、桐園は、明治六年（一八七三）までは本庄村において家塾を続けていたが、同年三月、大阪府の江南小学校の教師となり、老松町に転居。さらに江戸堀南通りに転居して、学校勤務のかたわら、好徳学院と称する私塾を開いた。後、学校を辞職し、もっぱら私塾に教授していたが、明治十四年（一八八一）、五十九歳で没した。

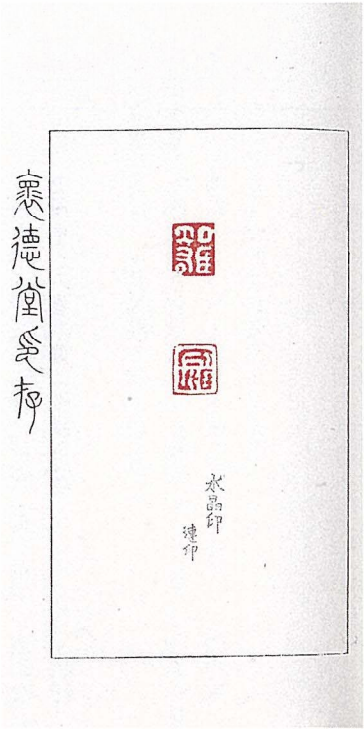
知雄（ちゆう）　守雌（しゅし）

（一）知雄／守雌
（二）1.6×1.3／1.5×1.4
（三）長方形・陰刻・単郭・円転／長方形・陽刻・無郭・円転
（四）三冊本　二巻五十九葉（柚園四葉）　「水晶印」「連印」
　　二冊本　二巻三十八葉（柚園五葉）　注記なし
　　七冊本　六巻五葉（柚園四葉）　「水晶印」「両面印」「淡黄色」

「知雄」と「守雌」とは、『老子』二十八章「知其雄、守其雌、為天下蹊。（其の雄を知り、其の雌を守り、天下の蹊と為す。）」に基づく。竹山によって黄金期を迎えた懐徳堂は、以後、衰退の道を辿っていく。そのような中で、「雄を知り」「雌を守る」という印文は、竹山時代の在りし日の栄光に思いを馳せて、なんとか懐徳堂を維持していこうとする、柚園の悲壮な声とも思える。水晶で作られた本印は美しいが、当時の懐徳堂の状況を考えると、美しさの裏に潜む決意が浮かび上がってくるようで、興味が尽きない。

なお、三冊本では「連印」と注記するが、七冊本の注記の通り「両面印」である。

（黒田秀教）


褒德賞爵
秋晶印
建印

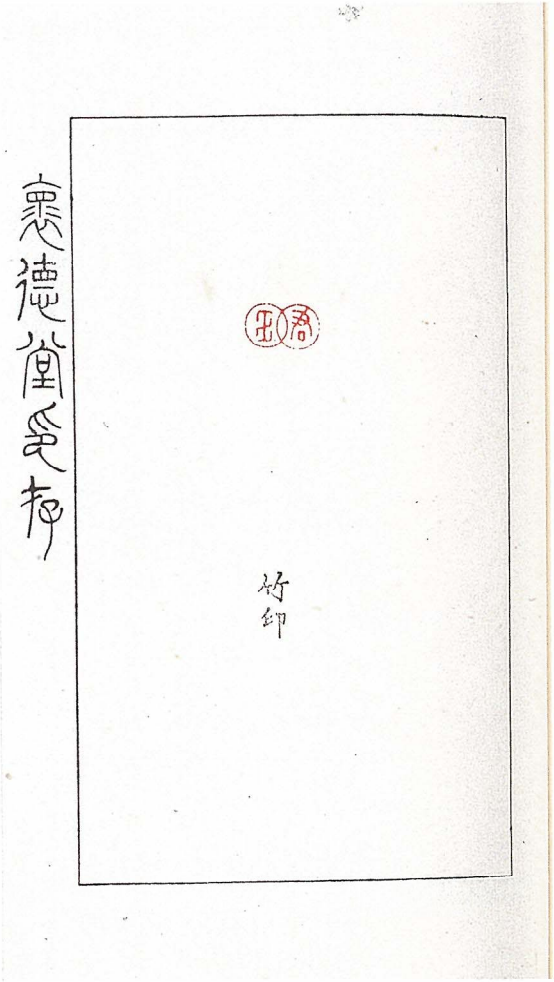
君玉（くんぎょく）

（一）君玉
（二）0.9×1.5
（三）円形・陽刻・単郭
（四）三冊本　二巻六十葉（柚園五葉）　「竹印」
　　二冊本　二巻三十五葉（柚園二葉）左下　注記なし
　　七冊本　六巻六葉（柚園五葉）　「竹印」

「君玉」とは、中井柚園の字である。

紐を見ても際だった特徴は感じられない。しかし、印面を見ると、二つの円が重なり合っており、大変印象的である。竹山や履軒のような力強さを感じる印と比べて、やや寂しく繊細な印象を受ける。懐徳堂の黄金期が過ぎたことは、印の中にも現れているようである。

（草野友子）

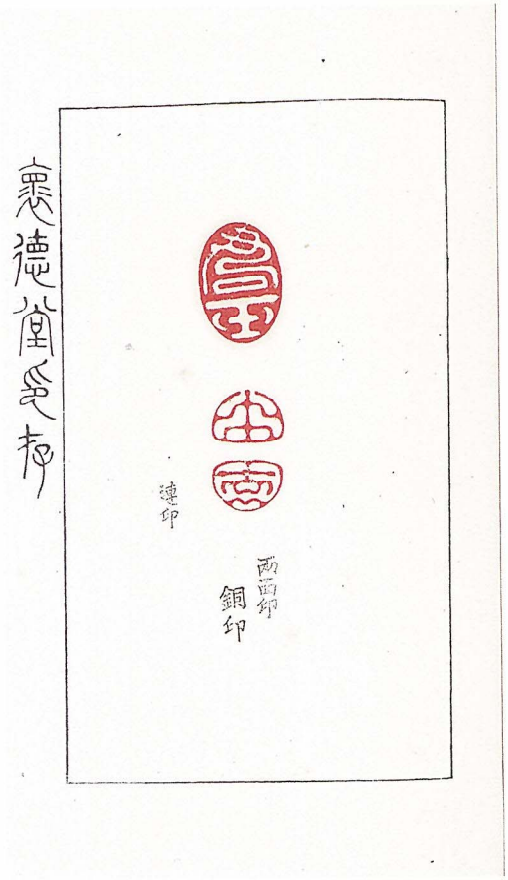

寒德堂長存
竹印

君玉（くんぎょく）　由（ゆ）　園（えん）

（一）君玉／由／園
（二）2.9×2.0／1.2×1.7／1.2×1.7
（三）楕円形・陰刻・無郭・円転／半円形・陽刻・単郭・円転／半円形・陽刻・単郭・円転
（四）三冊本　二巻六十二葉（柚園七葉）　「連印」「両面印」「銅印」
　　二冊本　なし
　　七冊本　六巻八葉（柚園七葉）　「連印」「両面印」「銅印」　紐の図示あり

「由園」は柚園のこと。「君玉」は柚園の字。
印文自体は平凡であるが、両面印であり、またその形状の独特さに強くひかれるものがある。

（久保宗之）


蓮印
西西印
銅印

君子風（くんしふう）

（一）君子風
（二）4.0×4.0
（三）方形・陽刻・単郭・印文大小
（四）三冊本　三巻五十七葉（桐園三十三葉）　「銅印」
　　二冊本　二巻五十一葉（桐園十二葉）　注記なし
　　七冊本　七巻三十四葉（桐園三十三葉）　「銅印」

文字を判読し難いが、「君子風」と思われる。

懐徳堂にある印章の印面に刻まれる文字は、篆書によるものがほとんどであった。しかし、この印は例外的に草書で書かれている。印の鋳造の過程か、または使用のためか、字が潰れてしまっていて、字の判別は非常に困難である。

（南　雄介）

銅印

中井木菟麻呂（一八五五～一九四三）

中井桐園の長男。中井履軒の曽孫に当たる。号は天生・黄裳。安政二年（一八五五）、懐徳堂内で生まれ、十四歳で懐徳堂の閉校を迎える。その後、中井家伝来の書籍などの保管、懐徳堂関係資料の蒐集、懐徳堂学舎の再建に努めた。重建懐徳堂が設立された後は、二度にわたって中井家伝来の懐徳堂関係資料を懐徳堂記念会に寄贈した。昭和七年（一九三二）には、資料を甲種遺物（旧懐徳堂書院の屏風・扁額など、書堂の付属物）、乙種遺物（中井甃庵・竹山・蕉園・碩果の遺書類など、中井氏一家の遺品）に大別した上で、甲種遺物四十七点を寄進し、昭和十四年（一九三九）には、旧懐徳堂および水哉館の遺書遺物を寄贈した。前者については、『懐徳』十一号に「懐徳堂遺物寄進の記」（中井木菟麻呂）の中に、また後者については、『懐徳』十七号に「懐徳堂水哉館遺書遺物目録」（吉田鋭雄）中の三百十五点として記録されている。現在、懐徳堂文庫所蔵資料で「天生寄進」の印記があるものがそれである。

中井木菟麻呂

旧懐徳堂と重建懐徳堂とをともに知る人物として、また、旧懐徳堂や水哉館の遺書遺物の継承という点で極めて重要な役割を果たした。なお、木麻菟呂は、敬虔なロシア正教徒でもあり、ニコライ大主教を助けて聖書の翻訳に尽力した。昭和十八年（一九四三）、八十九歳で没。

重建懐徳堂

大正二年（一九一三）に設立された財団法人懐徳堂記念会が、大正五年（一九一六）に東区豊後町（現・中央区本町橋）に建てた学舎のこと。敷地は、府立大阪博物場西北隅にあたる三百六十一坪が無償で貸与された。講堂では、昭和二十年（一九四五）三月の大阪大空襲によって焼失（書庫を除く）するまで、大阪市民のための授業が行われた。授業には、中国の古典と日本の古典とを中心にした講義（平日の夕刻と日曜の午後の一週五回）、人文科学の高度な内容の定期講演（毎週土曜日）、一般教養的な通俗講演（月に一～二回）、年少者を対象とする素読科などがあった。

重建懐徳堂復元模型

重建懐徳堂の事業運営費は、ほとんどが財団の基本財産と寄付とで賄われており、講演は無料、講義も低額の堂費（月額二十銭から二円）で受講できたため、多数の市民が来聴し、大阪の文科大学・市民大学の役割を果たした。

「重建」の称は、江戸期の旧懐徳堂を再建したとの意味であり、「ちょうけん」と呼ぶべきであるが、現在は「じゅうけん」の呼称が通行している。

なお、コンクリート造りの書庫に収められていて戦災を免れた重建懐徳堂の蔵書三万六千点は、昭和二十四年（一九四九）、懐徳堂記念会から一括して大阪大学に寄贈された。その図書目録として『懐徳堂文庫図書目録』（大阪大学文学部、昭和五十一年）がある。

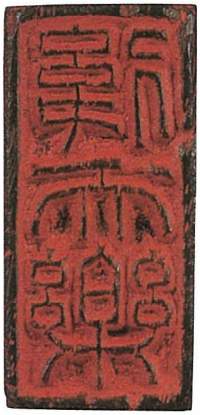
また、懐徳堂文庫資料の中に、その設計図面が残されていることが近年確認された。当時の設計・施工に当たられた竹中工務店により、その復元模型が制作され、二〇〇五年十月に大阪大学に寄贈された。模型は、五十分の一サイズのもの一点、百分の一サイズのもの二点が制作された。前者は大阪大学文学研究科の玄関に、また後者は大阪大学総長室と中之島センターに展示されている。

後天樂（こうてんらく）

（一）後天樂（後天楽）
（二）3.6×1.6
（三）長方形・陽刻・単郭・円転・印文大小
（四）なし

中井履軒は、私塾の二階の一室を「天楽楼」と名付けたほど、「天楽」という言葉に思い入れがあった（30頁参照）。履軒の曽孫にあたる中井木菟麻呂は履軒に憧れており、「後」天楽という印を使っていたと思われる。また、木菟麻呂は懐徳堂と履軒の私塾であった水哉館との再建を夢みていた。懐徳堂は重建懐徳堂として再興されたが、水哉館の復興は遂にならなかった。この印面には、両者を継承したいという木菟麻呂の想いが込められているとも考えられる。紐の造形にも魅力を感じる。木製であるためか、数カ所ヒビのようなものが入っている。それがまた味わい深い。

（西本和巳）



附録（一）　用語解説

用語	説明	例
方形	四角形の印。	
円形	まるい形の印。	
陽刻	文字や絵などが朱色になるように凸状に彫られたもの。朱文、陽文陽刻ともいう。主に実印に用いられる。	
陰刻	文字などが白抜きになるように凹状に彫られたもの。白文、陰文ともいう。主に書画の落款印（書画が完成したときに押印する印）などに用いられる。	

用語	説明	例
無郭	印文のみで、枠のないもの。	
単郭	印文の周囲を囲む枠が、一重枠であるもの。	
方折	印文の一点一画が四角く折れている字体。	
円転	印文の一点一画が丸みを帯びた字体。	

用語	説明	例
連印	一つの印に二つの印面が含まれるもの。一度に二つの印を押すことができ、名前や雅号を分ける場合が多い。	
両面印	印材の両端を印面としたもので、一面は姓名、他の一面は表字（字（あざな））・吉語・図案などにする場合が多い。	
子母印	一つの印の中に、母（大）と子（小）の二つに分離した印が含まれている印。母子印ともいう。（27頁参照）	

用語	説明	例
印文大小	印文に虚（画数が少ない字）と実（画数が多い字）とが混在する場合、文字の大きさを調整することによって、全体のバランスを取る用法。	
印中竪白	印文の左右の間に、縦向き一つの空白の帯があるもの。	
印中横白	印文の上下の間に、横向きに一つの空白の帯があるもの。	
点画歪斜	漢字をかたちづくる点と画とが、ゆがんで垂直ではないもの。	

（草野友子）

附録（二）『懐徳堂印存』解題

中井竹山から中井桐園までの懐徳堂先賢の印影を集めたもの。

二冊本（大正本）

大正元年（一九一二）、懐徳堂記念会は、中井木菟麻呂所有の竹山・履軒らの印章を中井家から借りて印譜を作成し、線装本二冊として百部限定で刊行した。そこには、竹山八十三顆（顆は印章の単位）、履軒六十三顆、蕉園十七顆、碩果四顆、柚園十七顆、桐園四十二顆の印影が収められている（連印は二面で一と計数、両面印・子母印はそれぞれ別顆と計数）。書帙内側に記載されている「明治壬子首春」の中井木菟麻呂の「附言」によれば、三宅石庵は終生印章を使用せず、中井甃庵、五井蘭洲、三宅春楼などの印章は散佚したため、収められていないとのことである。

三冊本・七冊本（昭和版）

昭和十五年（一九四〇）一月十二日、野内丘外編として刊行された同名の書である。これは、「懐徳堂」三字の印など散逸して中井家に伝わらなかった印を、諸資料の印影を参考にして模刻するなど、より完備した印譜としたもので、装訂は線装三冊本と七冊本とがある。懐徳堂文庫所蔵の三冊本によってその大略を示すと、まず扉に「懐徳堂印存」（狩野直喜の揮毫による）と記し、次に、大正元年本では巻末に付されていた天囚の跋文を序文として掲げ、続いて、「昭和十四年之冬」の木菟麻呂の序文を掲げている。

本文（印影）の部分は、基本的には大正本と同様であるが、配列は竹山、履軒、柚園、蕉園、碩果、桐園の順となっている。また、個々の印影の配列は大きく異なり、印影数も、竹山九十二、履軒六十八、柚園二十二、蕉園十七、碩果四、桐園四十二と増加している。また、大正本では、印影に関する注記は見られなかったが、昭和本では、「前川虚舟刻」「曽之唯刻」「高孺皮芙蓉刻」といった篆刻者情報、「陶印」「銅印」「水晶印」といった材質情報、「両面印」「連印」「子母印」といった形態情報などが新たに付記される場合がある。

なお、懐徳堂文庫所蔵の七冊本は、重建懐徳堂で講師を務めた大江文城の書き入れが見られる貴重な資料である。書き入れは、ほとんどの場合、「石印方木紐」「扶桑木」「象紐」などの形状情報である。

以下に、本書の代表として、三冊本の詳細な書誌情報を掲げる。

【書誌情報】

懐徳堂印存　三冊　昭和十四年（一九三九）序、野内丘外編。

〔寸法〕各冊24.7cm×15.0cm。郭内15.9cm×9.3cm。

〔書式〕四周単辺、無界の紙を使用。各葉表に鈐印、「懐徳堂印存」の耳題あり。裏には鈐印せず。

〔内題〕「懐徳堂印存」。「狩野直喜題」とある。

〔外題〕各冊ともなし。帙題簽「懐徳堂印存　全一函　三本」。図書ラベル「739.8　KAI　懐徳堂」。

〔奥書〕二冊目末尾に「編者識」として次の記載あり。「一、舊懐徳堂有堂號三字石印尾藩石撫子所刻散逸不存今據舊譜摹刻巻首所掲是也　二、編中刻者名號據中井氏舊印譜不錄印材者總爲石印」。（一、旧懐徳堂には、尾張藩大阪屋敷の役人で篆刻に長じていた中西石樵による「懐徳堂」三字の堂名を刻んだ石印があったが、散逸して伝わらない。今、旧印譜によって模刻した。二、編中に記す篆刻者名は、中井氏の旧印譜の記載に基づく。印材を記していないのは全て石印である。）

〔印記〕一冊目、内題の前葉に「懐徳堂」、西村天囚序文第一葉に「大阪大學圖書之印」「昭和26.9.10受入　33167」。二冊目冒頭に「大阪大學圖書之印」「昭和26.9.10受入　33168」。三冊目冒頭に「大阪大學圖書之印」「昭和26.9.10受入　33169」。

〔装訂〕康熙綴じ（中国清朝の康熙年間に流行した袋綴じの方法。四針眼訂法の上端・下端にさらに一穴ずつを加えたもの）。一冊目序文四葉、「竹山先生印影」五十八葉。二冊目「履軒先生印影」五十四葉、「柚園先生印影」十九葉。三冊目「蕉園先生印影」十八葉、「碩果先生印影」五葉、「桐園先生印影」三十五葉。

〔蔵書票〕なし。

〔付箋番号〕「001097～001099」。

〔備考〕懐徳堂文庫図書目録該当頁　国書十二上

なお、七冊本の内、「竹山先生印影」については、なぜか印影の配列が途中から三冊本と大きく異なっている。また、「柚園先生印影」は一顆の印影を欠く。これを除けば、印影数自体は同じである。

（湯浅邦弘）

附録（三）『懐徳堂印存』序

曩日、大阪士人相謀、挍刊懐徳堂遺書、以祭諸儒之霊、又展観詩書画、遂製印譜、以頒同好。所以景賢報徳者、可謂厚矣。蓋諸儒先生、或以学問行誼、或以経済文章、為海内所宗仰。流風余沢、至今不衰。若夫詩書画、抑又緒余耳。況区々図章乎。然亦有説焉。礼云、「物之感人也無窮。」蘇子瞻云、「君子可以寓意於物。」夫図章者、上自天子、下至庶人、用以示信。而学士文人所用、文尚典雅、其寓意也深。感人也無窮。徳容風範可以彷彿。不啻鉅匠名手仿古出新、足以供観・取法也。斯編所収竹山・履軒・蕉園・碩果・柚園・桐園六家遺印数十種、多係当時名人之作。中井君黄裳宝護甚勤。黄裳為竹山先生曽孫。篤行好学、不失旧物。頃者、悉出秘蓄、以託存于懐徳堂記念会。印亦其一也。彦監理会務祭事、既畢。斯編亦成、乃志其陋、而題数語於巻端。

明治四十五年五月　天囚西村時彦譔并書

曩日、大阪士人 相謀り、懐徳堂遺書を挍刊して、以て諸儒の霊を祭り、又た詩書画を展観し、遂に印譜を製りて、以て同好に頒かつ。賢を景ぎ徳に報ゆる所以なる者、厚しと謂うべし。蓋し諸儒先生、或いは学問行誼を以て、或いは経済文章を以て、海内の宗仰する所と為り、流風余沢は、今に至るまで衰えず。夫の詩書画の若きは、抑も又 緒余なるのみ。況んや区々の図章においてをや。然れども亦た説有り。礼に云く、「物の人を感ぜしむるや窮まり無し。」と。蘇子瞻云く、「君子以て物に寓意すべし。」と。夫れ図章とは、上は天子自り、下は庶人に至るまで、用いて以て信を示す。而して学士文人の用うる所、文は典雅を尚び、其の寓意は深きなり。人を感ぜしむるや窮まり無きなり。徳容風範 以て彷彿すべし。啻だに鉅匠名手 古えに仿い新しきを出すのみならずして、以て供観・取法するに足るなり。斯の編 収むる所 竹山・履軒・蕉園・碩果・柚園・桐園六家の遺印数十種、多く当時の名人の作に係る。中井君黄裳 宝護すること甚だ勤む。黄裳竹山先生の曽孫為り。篤行好学にして、旧物を失わず。頃者、悉く秘蓄を出して、以て懐徳堂記念会に託存す。印も亦た其の一なり。彦 会務・祭事を監理し、既に畢わる。斯の編も亦た成り、乃ち其の陋を志し、而して数語を巻端に題す。

〔現代語訳〕

先だって、大阪の士人が企画して、『懐徳堂遺書』を校刊し、諸儒の霊を祭り（記念式典を行い）、また詩書画を並べて多くの人に見せ（展覧会を行い）、遂には印譜を製作し、同好に分かち与えた。先賢を仰ぎ恩徳に報いるところ、甚だ厚いと言うべきである。思うに諸儒の先生は、あるいは学問・品行によって、あるいは経済（経世済民）・文章によって、天下に仰ぎ尊ばれる所となった。先人の残した習わしや恩恵は、今に至るまで衰えていない。その詩書画のようなものは、そもそもまた残余であるだけである。まして小さな図章（印章）においてはなおさらである。しかしまた説がある。『礼記』に言う、「〔外〕物は〔限りなく多いから〕人を感じさせるところはとどまることがない。」と。蘇子瞻（蘇軾）が言う、「君子は物に寓意す（かこつけて思いを述べる）べきである。」と。図章（印章）とは、上は天子より、下は庶民に至るまで、用いて偽りなく信頼できることを示したものである。そして学士や文人が用いるもので、文は典雅を尊び、その寓意は奥深い。人を感じさせるところはとどまることがない。徳が高い姿や風采は彷彿できる。ただ鉅匠・名手は古えに倣い新しさを出すだけでなく、公開したり世の模範とすることができる。この編が収めている竹山・履軒・蕉園・碩果・柚園・桐園六家の遺印数十種は、多くは当時の名人の作による。中井君黄裳（木菟麻呂）は〔これらの印を〕宝物として護ることに大変心を尽くした。黄裳（木菟麻呂）は竹山先生の曾孫である。〔木菟麻呂は〕篤行・好学であり、祖先の残した物を失っていない。近頃、〔木菟麻呂は〕秘め蓄えていたものをすべて出して、懐徳堂記念会に委託した。印もまたその一つである。〔私、時〕彦（天囚）は懐徳堂記念会の会務や祭事を監理し、〔一連の事業は〕既に終わった。この編もまた完成し、そこで〔私、天囚は〕愚見を書き記し、そして数語を巻頭に掲げるのである。

明治四十五年五月　天囚西村時彦譔并書

〔語釈〕○曩日…先だって、さきの日。　○懐徳堂遺書…明治四十四年（一九一一）、懐徳堂記念会によって刊行された書。旧懐徳堂の復興顕彰を目的に、明治四十三年（一九一〇）に設立された懐徳堂記念会は、そのための具体的な事業として、旧懐徳堂所蔵の貴重書を翻刻して刊行する計画を立てた。五井蘭洲関係として『茗話』『勢語通』、中井竹山関係として『奠陰集』『竹山国字牘』、中井履軒関係として『論語逢原』の五種、および「懐徳堂五種」としてまとめられた

『論孟首章講義』（三宅石庵）、『五孝子伝』『富貴村良農事状』（中井甃庵）、『蒙養篇』『貞婦記録』（中井竹山）の総計十種であり、いずれも活字翻刻され、「懐徳堂遺書」と総称された。なお、これらとは別に、戦後、懐徳堂記念会が大阪大学に寄贈した旧懐徳堂蔵書三万六千点を「懐徳堂遺書」と総称する場合もある。（『懐徳堂事典』二〇八頁参照）　○以祭諸儒之霊…懐徳堂師儒公祭（懐徳堂の儒者を偲ぶ記念式典）のことを指す。大阪府立図書館長今井貫一の主唱で創設された大阪人文会の明治四十三年（一九一〇）一月の例会で、西村天囚は、五井蘭洲の事跡を講演し、懐徳堂師儒公祭の挙行を提案した（ただし、師儒公祭の件を推進したのは、中井木菟麻呂であるとの別伝もある）。その提案は、人文会の席上で可決され、懐徳堂記念会が母体となって、明治四十四年（一九一一）、中之島公会堂において第一回の式典を挙行した。発起人には、高崎親章（大阪府知事）、植村俊平（大阪市長）、村山龍平（朝日新聞社長）、本山彦一（大阪毎日新聞社長）、住友吉左衛門（住友銀行社主）、鴻池善右衛門（鴻池銀行社主）など、政財言論界の著名人が名を連ねている。昭和二十年（一九四五）の重建懐徳堂の焼失によって断絶したが、その精神は、戦後の記念会・友の会における「懐徳忌」として引き継がれている。（『懐徳堂事典』二一〇頁参照）　○展観詩書画…展観とは、作品・物品などを並べて多くの人に見せること。ここでは、懐徳堂展覧会を指す。明治四十四年（一九一一）十月一日～六日、府立大阪博物場美術館で開催された。その前年、西村天囚らの呼びかけで懐徳堂を顕彰する懐徳堂記念会が設立され、翌四十四年には、懐徳堂の儒者たちを顕彰する記念式典を挙行し、貴重書の復刻刊行を行うなど積極的な顕彰活動を展開した。本展覧会もそうした事業の一環として開催されたものであり、「懐徳堂展覧会目録」が編纂された。同目録は、「水哉館遺書遺物出陳目録」「諸家出陳目録」からなり、前者は資料の蔵有者である中井家出品のリスト、後者は、三宅石庵・中井甃庵、五井蘭洲などに分けて、各々、資料名とその出品者名が記されている。（『懐徳堂事典』二一二頁参照）　○行誼…品行、正しい行い（品行は必ず道義に合うべきであるからいう）。誼は義に同じ。「民以故棄行誼而死財利。是以犯法而罪多、一歳之獄以万千数。」（『漢書』董仲舒伝）　○流風…先人の残した良い習わし、後に残った美風。「紂之去武丁未久也。其故家遺俗、流風善政、猶有存者。」（『孟子』公孫丑）　○余沢…先人の残した恵み、前人の恩恵。「唐亡、諸盗皆生於大中之朝、太宗之遺徳余沢去民也久矣。」（『唐書』董昌伝）　○緒余…残余、あまり、残り。「道之真以治身、其緒余以為国家、其土苴以治天下。由此視之、帝王之功、聖人之余事也、非所以完身養生也。」（『荘子』譲王）、「司馬李云、緒者、残也。謂残余也。」（『経典釈文』荘子音義）　○区々…小さい、わずかな。「区区、丘于反、小貌。」（『経典釈文』春秋左氏音義）、「区区、小也。」（『広雅』釈詁）　○礼云、物之感人也無窮…「人生而静、天之性也。感於物而動、性之欲也。物至知知、然

後好悪形焉。好悪無節於内、知誘於外、不能反躬、天理滅矣。夫物之感人無窮、而人之好悪無節、則是物至而人化物也。人化物也者、滅天理而窮人欲者也。於是有悖逆詐偽之心、有淫泆作乱之事。是故強者脅弱、衆者暴寡、知者詐愚、勇者苦怯、疾病不養、老幼孤独、不得其所。此大乱之道也。」(『礼記』楽記)　○蘇子瞻…北宋の詩人・文章家である蘇軾（一〇三六～一一〇一）のこと。唐宋八家の一人。洵の子。轍の兄。字は子瞻、号は東坡。大蘇と称される。詩は宋代第一とも言われ、また書画をもよくした。諡は文忠。著作に『赤壁賦』、『東坡詞』、『東坡志林』などがある。　○君子可以寓意於物…「君子可以寓意於物、而不可以留意於物。寓意於物、雖微物足為楽、雖尤物不足以為病。留意於物、雖微物足以為病、雖尤物不足以為楽。」(蘇軾『宝絵堂記』)　○寓意…他の物事にかこつけて思いを述べること。「及三閭橘頌、辞采芬芳、比類寓意、及覃及細物矣。」(『文心雕龍』頌讃)　○示信…偽りなく信頼できることを示す。「印章以名以字、所以示信。」(『古今印史』印章用成語)　○徳容…徳の高いすがた、良い評判。「公孫碩膚、徳容不瑕、道成王大美声称遠也。」(『小爾雅』広訓)　○風範…風采、人柄、人の立派な様子。人の言行・態度をひっくるめていう。「顔竣表世祖、張暢遂不救疾、東南之秀、蚤樹風範、聞問悽愴、深切常懐。」(『宋書』張暢伝)　○黄裳…中井木菟麻呂の号。　○頃者…近頃、この頃。　○陋…狭い、知識が狭い。「多聞日博、少聞日浅。多見日閑、少見日陋。」(『荀子』修身)

後懐徳堂印存序

懐徳堂・水哉館印章、竹山・履軒・蕉園・碩果・柚園・桐園共二百許。明治四十五年三月合遺書遺品、託存于大阪府立図書館、懐徳堂印存成于此際。昭和十四年三月、寄進遺書遺品於懐徳堂記念会、独留遺印、置于家。蓋図章所以示信、蔵之家廟、為合礼。吾家印譜不備。竹山・蕉園・碩果三先生廑有一本印存亦無残帙。於是同風印社同人丘外野内君与同志謀承其師園田湖城子提護、追押五十部継于印存。以伝鸞翔鳳翥之妙於千載云。

後懐徳堂印存序

懐徳堂・水哉館印章、竹山・履軒・蕉園・碩果・柚園・桐園共に二百許り。明治四十五年三月、遺書遺品を合し、大阪府立図書館に託存し、懐徳堂印存 此の際に成る。昭和十四年三月、遺書遺品を懐徳堂記念会に寄進するに際し、独り遺印を留め、家に置くのみ。蓋し図章は信を示す所以なれば、之れを家廟に蔵し、礼に合するを為す。吾が家に印譜備わらず。竹山・蕉園・碩果三先生、廑かに一本有るのみ。印存 亦た残帙無し。是に於いて同風印

昭和十四年之冬　中井天生成文撰

社の同人　丘外野内君　同志と謀りて其の師　園田湖城子の提護を承け、五十部を追押し印存を継ぐ。以て鸞翔鳳翥の妙を千載に伝うと云う。

昭和十四年の冬　中井天生成文撰

〔現代語訳〕

懐徳堂・水哉館の印章は、竹山・履軒・蕉園・碩果・柚園・桐園〔の物を合わせて〕二百ばかりをそなえている。明治四十五年三月、遺書遺品を合わせ、大阪府立図書館に託して保存し、『懐徳堂印存』はこの際に成った。昭和十四年三月、遺書遺品を懐徳堂記念会に寄進した際も、ただ遺印だけは残し、家に置いた。思うに図章は信用を示すものであるから、これを家廟にしまい、〔これは〕礼に適合させようとしたのである。私の家には印譜は備わってはいない。竹山・蕉園・碩果三先生の印譜がわずかに一本あるだけであった。印存もまた残部がもうない。ここにおいて同風印社の同人　丘外野内君が同志と相談してその師である園田湖城子の指導を受け、五十部を追加で鈐押して印存を継いだ。鸞翔鳳翥の妙を千年にわたって伝えると言えよう。

昭和十四年の冬　中井天生成文撰

〔語釈〕○合礼…礼に適う。「君子体仁足以長人、嘉会足以合礼、利物足以和義、貞固足以幹事。」（『易経』乾卦・文言伝）　○園田湖城…篆刻家。滋賀県生まれ。名は耕作、のち穆、字は清郷、別号に平盛。富岡鉄斎・内藤湖南らと交わる。書画の鑑定に詳しく、有隣館の顧問をした。昭和四十三年（一九六八）八十三才で没す。　○鸞翔鳳翥…鸞鳥・鳳凰が飛び回る様子。筆勢の巧みさの形容。「公従何処得紙本　毫髪尽備無差訛　辞厳義密読難暁　字体不類隷与科　年深豈免有欠画　快剣斫断生蛟鼉　鸞翔鳳翥衆仙下　珊瑚碧樹交枝柯　金繩鉄索鎖紐壮　古鼎躍水龍騰梭」（韓愈『石鼓歌』）

（平成十七年度漢籍資料学演習「懐徳堂文庫漢籍の研究」の成果による）

〔参考文献一覧〕

・湯浅邦弘編『懐徳堂事典』、大阪大学出版会、二〇〇一年。
・西村天囚『懐徳堂考』、懐徳堂友の会、一九八四年復刻刊行。
・服部畊石編『篆刻字林』、三圭社、二〇〇五年。
・蓑毛政雄編『必携 篆書印譜字典』、柏書房、一九九一年。
・関野香雲『篆刻入門』、澤書店、一九五八年。
・王本興編『印章章法分類』、天津人民美術出版社、二〇〇三年。

〔執筆者一覧〕

＊湯浅邦弘（大阪大学教授）
池田光子（大阪大学総合学術博物館研究支援推進員）
＊黒田秀教（台湾明道管理学院助理教授）
＊草野友子（大阪大学中国哲学研究室大学院生）
西本和巳（同）
南　雄介（同）
村田誠治（大阪大学中国哲学研究室卒業生）
久保宗之（大阪大学中国哲学研究室学部生）

＊印は、編集担当者

『懐徳堂の印章』
2007年3月1日
発行：大阪大学大学院文学研究科
編集責任　湯浅邦弘
〒560-8532
豊中市待兼山町1-5
大阪大学大学院文学研究科
印刷・装丁：凸版印刷株式会社